

# 国語 選抜試験

新中一

一 次の——線の読みを書きなさい。

(4)(1) 我を忘れて仕事する。  
妹は親に従順な子です。

(5)(2) 市庁舎を建て直す。  
砂鉄を集める。

(3) 洗ったものを干す。

二 次の——線を漢字で書きなさい。

(4)(1) ばくふが江戸にあった。  
適切にしよちする。

(5)(2) 要人のけいごをする。  
はいかつりょうを測定する。

(3) 水がじょうはつする。

三 次の各問いに答えなさい。

問一 次の各組の漢字に共通してつづけることのできる部首の名前を、ア～カからそれぞれ選びなさい。

(2)(1) 寺・走・主  
祭・谷・示

ア にんべん  
エ ごんべん

イ こぎとへん  
オ わかんむり

ウ うかんむり  
カ ぎょうにんべん

問二 次の熟語の対義語（反対語）を、    の漢字を用いて、二字でそれぞれ書きなさい。

(2)(1) 許可  
生産

断 止 製 消 育 成 禁 費 中 造

次の文章を読んで、問いに答えなさい。

私は、週に一度、ラジオの「子供電話相談室」という番組に出ている。子供が電話で質問してきて、大人の私がそれに答える。それが電波にのるといいうしくみだ。なにしろ生番組である。その場で答えなければならぬ。

その子供たちの質問はさまざまで、しばしば奇想天外<sup>きそうてんがい</sup>のものがあつた。大人の私をあわてさせる。たかが子供の質問ではないか、と、<sup>①</sup>たかをくくっているわけにはいかない。□□<sup>②</sup>こんな質問があつた。

—あの、なぜ親はえらいんですか。

<sup>③</sup>私は困つた。「なんだって」といったまま、しばらく答えられなかった。こんな質問を大人はしない。ことに親になつた大人は決してしないだろう。だが、答えを知っているからしないのではない。いつのまにか、子供のように、なぜと考えるようになっただけなのだ。私も往生した。

困つたから、逆に質問した。時間かせぎは逆質問にかぎるのだ。<sup>④</sup>子供たちよゴメンナサイ。

—ええと、君は、親はえらいと思つているの。

—すると、相手から、こんなびっくりさせる答えが返つてきた。

—あんまり、えらいと思えないんだ。

—そうかあ。

と答えて、絶句した。なるほど、そう思えないから質問してきたのだ。私はひとりごとのようにつぶやいた。

(なだいなだ「親子つて何だろう」より)

(注) 奇想天外——思いもかけない。

往生——ここでは、困ること。

問一 文中の□□にあてはまる言葉として最も適当なものを、ア～エから選びなさい。

- ア あるいは イ すなわち  
ウ たとえば エ なぜなら

問二 —線①「たかをくくっている」とありますが、「たかをくくる」の意味として最も適当なものを、ア～エから選びなさい。

- ア 軽くみる。 イ 決心する。  
ウ 気にする。 エ 相手にしない。

問三 —線②「私は困つた」とありますが、なぜ困つたのですか。その理由として最も適当なものを、ア～エから選びなさい。

- ア 自分は親ではないので答えられないと思つたから。  
イ 大人になつてから考えなくなつたことを質問されたから。  
ウ いつも同じことを子供たちに質問されるから。  
エ 今はえらい親が少なくなつてきているから。

問四 —線③「子供たちよゴメンナサイ」とありますが、筆者がこのように謝<sup>あやま</sup>っているのはなぜですか。その理由を述べた次の文の□□A・Bにあてはまる言葉を、文中から二字でそれぞれ書きぬきなさい。

- ・筆者が逆に□□A□□<sup>④</sup>することで、□□B□□<sup>⑤</sup>をかせぎ、答えを先にのばしたから。

次の文章を読んで、問いに答えなさい。

「こい料理で有名な旅館の太七じいさんから、大きなこいを一匹もらった村治はそれを宝物のように大切に育てていた。村治は水おけの中の落ち着いたこいのようすを見ては、自分もそうなりたいと思っていた。十二月のある日、町の工場へ働きに出ていた美代姉ちゃんが、むねの病気で仕事をやめて、帰ってくることを知った。

そのあくる日、①ひどめをさけて最終のバスで帰ってきた美代姉ちゃんが、小さなカバンをさげて、月の光できらきら光っている雪の中へおりてきた姿を見たとき、村治は②どきつとした。父がけがをしてからこつち、美代姉ちゃんの送ってくれるお金をあてにしている家のようすを、よく知っている姉ちゃんは、よつぽど無理をして働き続けてきたものにちがいない。ほおなどげっそりやせおとろえて、村治がかけよってだきつくと、よろよろつとよろめいた。

母はかまどの前にすわりこんで、姉ちゃんに食べさせる夕飯をたいていた。姉ちゃんはいろりのそばに小さくすわって、父と話をしていた。その姉ちゃんの横顔をじつと見ているうちに、村治はくちびるをかみしめて、よおしと③決心して立ち上がった。

そして流しもとへ行つて、でばぼうちようを取つてくると、母に、

「ごはんができて、まだ出さんと待っててな。おれ、姉ちゃんに食べさせる、とてもじようぶになるおかずをこさえてくるから……。」

と言うなり、走るようにうらの取り水のところへ行つた。

さえざえと月の光のさし込んでいる水おけには、もう厚い氷がはっていた。その下で大事な村治のこいは、おびれだけをほんの静かにふりながら、石のようにじつとしずんでいた。

村治ははげしい息づかいをしながら、またたきもしないでしばらくそれを見つめていたが、間もなくぱりぱりつと氷を割つて手をつっこみ、いきなりこいをつかみだした。

手のひらの中でびくびく動く、こいの強い力は、村治のむねを

だが、村治はなにくそというふうにぎらぎら目を光らせて、こいを石の上に置いて左手でおさえつけた。

そして、右手ででばぼうちようを持ち直すと、いきおいよくうろこをはぎにかかった。

そんなむごたらしいしかたで、一生けんめいいうろこをはぎながら、そのくせ村治の目からは、④ぼろぼろとなみだがこぼれ落ちていた。

村治はまるで何かにつかれたように、手早く仕事を進めた。

さかさになでられたうろこは、べちべちと音を立てて、ほうちようの刃を飛びこえ、月の光の中へひっきりなしに、ぴんぴんと光って飛びちっていった。

(注) いろり——ゆかを四角に切つて火を使えるようにした所。 またたき——まばたき。

(花岡大学「冬のこい」より)

問一 ——線①「ひどめをさけて」とありますが、その意味として最も適当なものを、ア～エから選びなさい。

ア に出すように

イ 人に気づかれぬように

ウ 家族にも知らせないで

エ 混雑にあわないように

問二 ——線②「どきつとした」とありますが、村治が「どきつとした」のはなぜですか。その理由を、文中の言葉を用いて書きなさい。

問三 ——線③「決心して」とありますが、村治はどのようなことを決心したのですか。「体」という語を用いて、三十五字以内で書きなさい。

問四 文中の□にあてはまる言葉として最も適当なものを、ア～エから選びなさい。

ア 不思議な思いにさせた

イ いっそう元気づけた

ウ 悲しくしめつけた

エ 希望で高鳴らせた

問五 ——線④「ぼろぼろとなみだがこぼれ落ちていた」とありますが、このときの村治の気持ちとして最も適当なものを、ア～エから選びなさい。

ア こいを殺すのはしのびないが、美代姉ちゃんのためにはこいを殺すしかないという気持ち。

イ 自分がむごたらしい殺し方をしようとしていることに気づき、こいがかわいそうでならないという気持ち。

ウ こいよりもこの先の美代姉ちゃんの病気のことを思うと、悲しくてたまらないという気持ち。

エ 大切にしていたこいを殺すくらいなら、太七じいさんに返してしまえばよかったという気持ち。

問六 この文章の主題として最も適当なものを、ア～エから選びなさい。

ア 家のぎせいになってきた姉に対して、自分にできる最大の感謝を示すことの大切さ。

イ 姉が病気になるたにもかかわらず、積極的に生きていこうとする村治の生き方。

ウ 姉のために悲しんだり苦しんだりしながら、そこから立ち直ろうとする人々のたくましさ。

エ 姉のためにできることとして、大切に育ててきたこいを殺すつらさにたえている村治の姿。

次の文章を読んで、問いに答えなさい。

夏の夜は、幽霊や妖怪（お化け）が出やすい、とされてきた。幽霊と妖怪は、区別がつきにくいところがある。が、一般的な解釈としては、幽霊は、特定の人の死霊とする。対して、妖怪は人間以外の精霊や死霊をもって正体不明の「ものの怪」とする。

幽霊は出現場所を選ばないが、特定の人を対象に出現する。その時間は五三つ時（午前二時前後）が定説となっている。したがって、<sup>②</sup>相手が就寝時の枕元や用足しに向かった厠のあたりに出現することに相なる。対して、妖怪は、山・川・道端・古屋敷など出現する場所がほぼ特定される。なかでも、川にかかる橋のたもとがもつともあやしい場所となる。橋が築かれる前までは、川の間は異界とする観念が強かった。それを橋をもって結んだわけだから、異界から魑魅魍魎がわたってきて橋のたもとにひそむ、あるいは橋のたもとで待ち受ける、としたのも当然のことであった。<sup>③</sup>その幻想をいだいたところで、橋のたもとはいっそうおそろしいところとなったのである。

また、妖怪が出現するその時間は、たそがれ時である。たそがれは、誰そ彼。かわたれ時ともいう。日暮れ時であって、見えにくい。よけいに恐怖心がつる。それを「逢う魔が時」ともいったのは、つまりは妖怪と出会う時間帯だからである。

幽霊や妖怪の出現は、とくに盆の前後に集中する、という認識が一般には根強いのではなからうか。盆は、旧暦七月十三日から十五日、十六日まで。先祖の霊を家に迎え、供物を供えて供養する行事である。中国の盂蘭盆経に由来するとされ、現在では仏教行事として広がりを見るが、日本列島に土着の「御魂まつり」が下地にある。先祖の御魂をこの時期に祀っていたもので、それに仏教の供養思想が重なって今日に伝わる盆行事となった、とみるのが妥当なのである。その結果、盆に迎える祖霊は、大別して三種。一般的には本仏（祖霊）と新仏（新精霊）と無縁仏（餓鬼霊）<sup>④</sup>とに分け、扱いをたがえる。本仏は、すぐに仏壇に招請する。新仏は、まだ成仏せずにさまよえる霊として、座敷や縁側に別の祭壇を設けてそこに祀る。無縁仏は、血縁霊ではないから家には招き入れない。ただ、それは、ときに悪しきとりつきもするので、庭に餓鬼棚を設けて供養する習慣が伝わる。

だが、祖霊が中心とはなるものの、有縁無縁の精霊は数多く存在する。そのなかで、この世に思いを残して死んだ怨霊の祀り方は、ないがしろにされる傾向があった。

幽霊は、そうした怨霊の変化、としてよい。「うらめしや」と登場するのも、それゆえのことなのである。ただ、足のない幽霊像は、さほど古くからの連想ではない。通説では、円山応挙がそれを描いて以来のこと、とされる。その絵があまりに幽玄の世界を見事に描いた秀作だったために、以来広く既成概念をつくることになったのだ。じつは、足のある幽霊の絵図も数多いのである。

むろん、幽霊も妖怪も実在はしない。人びとの不安や懐疑のなかで生じる幻想である。

（神崎宣武『『旬』の日本文化』より）

（注）厠——トイレ。 相なる——なる。

盂蘭盆経——中国で成立したお経。

有縁無縁——血縁があるかないか。 円山応挙——江戸時代の絵師。

幽玄——情緒に富み、しみじみと奥深いこと。 既成概念——ここでは、一般的なイメージのこと。

懐疑——疑い。

問一——線①「ものの怪」とありますが、これは何のことですか。最も適当なものを、ア～エから選びなさい。

ア 祖霊      イ 生き霊

ウ 妖怪      エ 幽霊

問二——線②「相手が就寝時の枕元や用足しに向かった厠のあたりに出現する」とありますが、幽霊がこのころに出現するのはなぜですか。その理由を述べた次の文の  A・B にあてはまる言葉を、文中から四字でそれぞれ書きぬきなさい。

・幽霊は出現場所を選ばず、  A を対象に、  B 前後に出現するものだから。

問三——線③「その幻想」とありますが、どのような幻想ですか。最も適当なものを、ア～エから選びなさい。

ア 川の向こうにいる魑魅魍魎がおそいにくるという幻想。

イ 異界と人間界を結ぶ橋のたもとには妖怪がいるという幻想。

ウ 人間が異界に行くためには橋をわたらねばならないという幻想。

エ 橋のたもとは気味が悪くおそろしいところであるという幻想。

問四——線④「無縁仏」とありますが、これはどのように扱いますか。文中から十三字で書きぬきなさい。

問五 筆者は、幽霊や妖怪の存在について、どのように考えていますか。「幽霊や妖怪は」に続けて、三十字以上四十字以内で書きなさい。「幽霊や妖怪は」は字数に含めます。